「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

⑥⑦

リレーエッセイ

「しがらみ」に生かされて

新潟県長岡市　武樋　和嘉子

自然に泣けてくるほどに美しい景色、すぐには思い出せないけれど心が滑らかに波打つなつかしい風景がある。そこに漂うたまらなく切ない香りに、幼い頃の記憶なのか、体の細胞の一つが記憶しているものなのかはわからないが、心の故郷を感じさせる。

誰もが心の故郷、いわば「帰る場所」を求めている。温かい家族の待つ家、懐かしさに包まれた生まれ育った家であったりするが、真の「帰る場所」とは、どんな状況にあっても、恐れず惑わないで訪ね続ける場所であり、必ずしもふるさとや住み慣れた家に限らない。

私は「五葉山の魅力」エッセイに自らを顧み、問いかけ、まっすぐな眼差しを向け、ひたむきに生きる人々の姿に心打たれる。地域の人々を温かく包み込む五葉山は、「帰る場所」として心の窓から見える故郷の風景であるように思う。

誰もが苦しさ、辛さ、悲しさの状況から早く抜け出したいと願い、抜け出そうと一生懸命努めている。それでも、現実の「しがらみ」という根を張る「大地」から目をそらし、理想の「天」を仰ぎ見たいと思う。

人はいつの時代も「翼」を持って、自由に空を飛び交う鳥のように飛べたら、どんなにかいいだろうか」と、大空に憧れ続けている。

文明が進むほどに人の孤独感が増し、「しがらみ」もまた増していくが、私もまた空を見上げて、「あぁ大空へ羽ばたきたい」と思う。持つことのできない翼と知りながら、憧れずにはいられないのが人間なのだろう。

人は強いようで弱く、たくましいようで、もろい。それだけに、大地に足をつけて生きることへの苦しみから逃れたいのかも知れない。大地の恵み、温かさを感じ取りながらも人間関係などで足を泥沼に突っ込んでしまい、そこから抜け出せないでいる。そんな呪縛から解き放たれるために、大空の無限の広がりの中に日常のすべてをかなぐり捨ててみたくなる。

哲学者であり、詩人であり、随筆家でもある串田孫一は、無心であることの美しさを白鷺の所作を例に、著書『鳥と花の贈りもの』で次のように述べている。

「目の前の風景を、焦点を一カ所において見ていると、頻（しき）りに身繕いをしている白鷺は眩しいほどに白く、蓮の花から生まれ変わったものかもしれないと思う。すると、此処は極楽であってもいい。きらびやかな楼閣が無くとも、楽の音らしいものがさっぱり聞こえて来なくとも、此処は私の今日の地上の楽園である。これ以上の贅沢は望まない…」

空を自由に飛び回る白鷺ではなく、泥沼に根を張る蓮の上で、身繕いする白鷺に作者は心を奪われ、この光景に極上の美しさを見ている。それは、遠い記憶の中に沈み込みながらも、人それぞれの心象風景を成す心の故郷に相通ずるものがあるような気がする。

翻って人間はどうなのだろうか。「これが足りない。こうすべきだ」と文句をいい、規範を押しつけ、他者との比較のなかでしか生きることはできない。いま私は、歩いてきた道を振り返り、自分に問うている。

「拠って立つ大地を捨て去り、大空に理想を追いかけていないだろうか。自分の立つ大地が底なしの泥沼であろうと寂寥とした砂漠のような環境であろうと、そこにしっかりと根を張るような生活をしているのだろうか」

生活に喜びを見いだせるか否かは、その場所に深い根が張られているかにかかっている。「しがらみ」という深い根こそが私を生かす力となっている。「いま、あなたのいる場所に根付いていくような生活をして行け」と内なる呼び声が聞こえる。

自ら流転し、根なし草になろうとしている自分への戒めの声でもある。遠い記憶の中から今に通じる心の故郷の道。いま、自分自身に求めているのはこの道をまっすぐ歩くことなのかも知れない。

近所の景色。小さいころ目にしていた風景に似ていて心が休まる

【執筆者プロフィール】一九七一年生まれ、新潟県長岡市在住。浄土真宗大谷派の寺に嫁ぐ。蓮光寺坊守。三人の子育て中。里山の寺から望む四季の景色に心が休まる。子どもたちが歩けるようになったら「五葉山」に出会いに行き、その素晴らしさをみんなで感じ取りたいと思っている。